

コミュニティは安心安全なのか

小島正裕 (PONYRIDE/1955)

KOJIMA Masahiro (PONYRIDE/1955)

はじめに

近代以前のコミュニティでは、国家、地縁・血縁、伝統、宗教など、確固たるもので結ばれた、安定した集団のなかで個々が自分の役割を果たしてきた。それはいわば、不自由だが平等な社会であった。

そして、産業革命以降の爆発的な経済発展がおとずれた。安定はしていたが不自由だった社会、身分制から解放され、「自由」と「平等」をもとめる〈個人=私〉が誕生した。「確固たるもの」の拘束から個人を解放し、与えられた関係性におさまらず、自ら関係を選択していく、自由だが不平等な社会が到来したともいえる。

その近代化が折り返し地点を超えた現代社会においては、〈私〉の価値基準を外的、超越的な何かに置くのではなく、他ならぬ〈私〉自身の中に求める。〈私〉のかけがえのない固有性。同時に、本来ならば社会的・公共的に解決されるべき問題まで、すべて個人が決定、判断する課題とされて、〈私〉の負担が大きい社会。「社会を変える」「大きな物語（革命）」から、「〈私〉を変える」という“小さな物語（自己啓発、自分らしさの追求）”への転換が起こった。

さらに、20世紀後半から21世紀にかけて急速なグローバル化、技術革新、情報化が進展した「後期近代」を、ポーランド出身の社会学者ジグムント・バウマンは「リキッド・モダニティ（液状的近代）」と定義した。バウマンの主張を入口に、不確定性の増す時代にバラバラに自由を追求する〈私〉=個人が、一方でコミュニティを渴望している現代の様相を見る。その上で、現代の新しいコミュニティが結果として同質性の高いものとなり、その結果排他性を生んでしまう可能性を問題提起し、それをいかに超えて共生できるのかを検討していく。

大会発表抄録

構想

2025,volume11

84 - 87

バウマンの現代コミュニティ論

バウマンは、冒頭にのべたような近代以前の社会のような安定した社会の状態を「ソリッド・モダニティ（固体的近代）」と呼び、その時代には存在したさまざまな確かさが失われた後期近代の状態を「リキッド・モダニティ（液状的近代）」と呼んだ。たとえば、確固とした職業や役割は希薄になり、消費物やストーリーで自分のアイデンティティを作り上げなければならない。強かった社会や集団の絆は切れて、いつでも好きな時につながったり切断したりできるものになった。貧困や失業は「社会的な問題」だったが、すべての責任は個人のもの、自己責任になった。

生活の多方面で頼れるコミュニティや規範が溶けてしまい、正解はどこにもない。足のつかない水のなかで泳ぎ続けるように、現代の私たちは常にアップデートし続け、終わりのないゲームをしている——そんな状況を、バウマンは「液状化」と表現した。

このように比較するとわかるように、現代の個人の自由さはすべて過去の温かさや拘束と引き換えるもので、「安心・安全」と「自由」は同時に最大化できない——そのジレンマ（トレードオフ）が、現代のコミュニティ問題の核心になるというのがバウマンの論点である。現代人は「自由」を手に入れたが、その代償として強烈な「不安（よるべなさ）」を感じることになった。そのため、失われた「コミュニティ（安全）」を激しく求めているが、同時に、一度手にした「自由」を手放すことも恐れているのである。

そしてバウマンは、現代のコミュニティが排他性によって維持されやすいとも指摘した。なぜなら、〈私〉たちどうしの絆が希薄であるため、「外部の敵」や「異質な他者」を設定し、それ

を排除することで、手っ取り早く内部の結束を高めようとする。「〈私〉たち」と「彼ら」／「頼れる仲間」と「外部の脅威」。境界線を明確に引き、〈私〉たちの安全を守るために、壁を作り同質性を高めて部外者を締め出すことで安心感を得ようとすることは、現代の排外主義につながる危険性をはらむのではないだろうか。社会の不確定さから来る安全への希求が、排外的な結束へとすり替えられているのだ。

★クローケルーム型共同体 (cloak-room community)

バウマンは現代のつながりを、劇場のクローケルーム（荷物預かり所）に例えた。

観劇（共通の関心事やイベント）の間だけ、人々はコート（個人の重荷やアイデンティティ）を預けて一体感を楽しむ。

しかし、劇が終わればコートを受け取り、バラバラの個人に戻る。

終われば解散する、一時的で、持続的な責任や義務を伴わない、その場限りの連帯。

同質化の構造とその限界

次に、現代のコミュニティが内向きに閉じることを、「純化されたアイデンティ（Purified identity）」という概念を使い批判したアメリカの都市社会学者リチャード・セネットの主張を通して、同質化のメカニズムを検討していく。本来人は、社会のなかで複数の役割を生き、矛盾や葛藤をかかえ成長していくが、同質的な集団のなかで管理され、予測性の高い人間関係のなかで秩序だった自分が硬直化していく傾向をセネットは危惧した。

整合的で静的な自己像を維持するため、不確実性や予測不能性、〈私〉たちと異なる価値観を排除した「純化の衝動」が異質性を敵視し、攻撃性と分断につながると強調する。フィルターを通して構築された関係性はすべてがスムーズで、あうんの呼吸で通じる仲間だけの空間（＝純化されたコミュニティ）は一見快適だが、そこからは新しいものが生まれにくい。異質性の欠如は、自己および社会が成熟する機会をそこなってしまうのだ。「秩序・純粹性・一

体感を求めるすぎるコミュニティは、人間を未熟にし、他者を排除する」と批判した。

また、政治学者ロバート・パットナムは、「社会的な繋がりとそこから生まれる規範・信頼」を「社会関係資本 (Social Capital)」と定義し、それを「結束型 (Bonding) 社会関係資本」と「橋渡し型 (Bridging) 社会関係資本」の2種類に分けて論じた。近代以前の集団内の強い結束を復活させるような、前者のような性格の強いコミュニティは、家族や親友、同じ民族など、似た者同士を強く結びつける機能が過剰になる。

偶然性の導入というアイデア

社会学者たちはそれぞれ、現代の新しいコミュニティづくりにおこりうる、同質性／排他性の性質について危惧してきた。「新しいコミュニティが、結果的に同質性の高い人の集団になり、外国人や“外部者”的な排除装置になってしまふ」

では、どうしたら良いのか？「偶然性」をその手がかりとして検討していく。

前項で見てきたように、同質的なコミュニティは「計画された出会い（フィルターを通した関係）」でできている。そこに「偶然」が入り込む余地を作ることで、フィルターによる選別メカニズムを超えて、排除の論理を無効化し、境界線を曖昧に、ゆるくできるのではないか。

アメリカのジャーナリスト、ジェイン・ジェイコブズは、都市の活力を生む要素を、「何気ない公的な接触 (Casual public contact)」「計画されていない交流 (Unplanned interaction)」「付隨的な、偶発的な (Incidental)」などの言葉で表現した。都市の歩道、路地で起こる「偶然の、気楽な、計画されていない」やり取りこそが、都市の安全と自由を守ると説いている。

また、セネットは、“役割の交差”を通じて、異質性をもったままの人が混じる仕組みを論じている。たとえば、料理を教える人と、習う外国人、子どもと高齢者が役割分担して関わるイベントなど、「同質性」ではなく「機能」を通じた共同作業で人が混じる可能性を述べてい

る。また、「無秩序」を受け入れる必要性を述べ、異質な他者と接触し、多少のストレスや交渉のある、適度なノイズや摩擦を楽しむ環境こそが本来の「都市」であり、成熟した場所だと論じている。

社会学者マーク・グラノヴェッターが提唱した「弱い紐帶（ちゅうたい）の強み（The strength of weak ties）」にも偶然性が関係する。身近な家族や親密な友人など、「強い紐帶」で結ばれ、似たような社会で行動している人からは、目新しい情報に触れる機会は多くない。

一方、「弱い紐帶」で結び付いている人、自分と異なる社会環境で生きる人とのたまたまおこるつながりは、思ってもみなかつたアイデアや関係性を得る可能性が高くなる。偶然性は「弱い紐帶」を自然に生む契機になるのではないか。

パットナムは、もう一つの社会関係資本として、「橋渡し型（Bridging）社会関係資本」を提示している。異なる背景・異なる民族・あまり知らない人同士を緩やかに結びつける潤滑油のような「包摂性」を生む関係性を論じ、現代社会に必要なのは、内輪を固める「結束型」ではなく、外部へ開く「橋渡し型」のネットワークを作ることであると結論づけている。そして、そのような結びつきをつくる鍵になるのは、偶然性によって生まれる様々な出会いではないだろうか。

ノイズのある偶然をコミュニティに実装する

最後に、それらの偶然性をコミュニティに実装するためのアクション・場づくりを検討する。あらかじめ機能がある場所は、用事がある人しかこない必然的な場所であると言える。逆に、「目的がなくてもいられる場所」があれば、そこには偶然が生まれる。ジェイコブズが論じたように、本来は「歩道」のようなものがその場にふさわしいと思われるが、「拡大された歩道」のようなイメージで、特定の個人や集団の思い、枠組みや名付けをなるべく避けた場をコミュニティに実装していく実験、具体例を紹介する。

個人的な取り組みとして、2025年9月から、川崎市の商店街の空き店舗を活用して、大学生ボランティアが運営する「一般社団法人駄可笑



屋敷（ダガシヤシキ）プロジェクトによる駄菓子屋をはじめた。駄菓子とそれを売る大学生を媒介に、こどもと地域の関係を再構築する活動に共感し、それを入口にしたスペース〈1955〉をつくり、今後は駄菓子販売以外にもできることを増やしていきたいと考えている。

〈1955〉の場は、以下の点を念頭において運営している。

1. 多様な役割が交差する空間

道に面した駄菓子屋ブース、ベンチに加え、ミーティングスペースやシェアキッチン、バッファになる空間をもうけて、複数のことが並行して行われるようにする。

2. 滞在の理由がバラバラで良い

駄菓子を売る大学生／駄菓子を買う小学生と大人／高齢者の休憩／キッチンを借りるカフェ開業準備中の外国人／ママ友の会合／コーヒーを飲む近隣住民…目的の異なる人が同じ場所をゆるくシェアする。

3. その日、その時間で変化する場

午後は駄菓子屋だが午前は大人が使う／毎日違う国の人／夜は飲み屋／可変的なテーブル、椅子のレイアウト／書き換えられる壁…1日のなかでいくつかの顔を持たせる。

4. プログラムしそうない

すべてを計画しないことで同質性をセーブする。

はじまつたばかりでまだ実現できていないことばかりだが、こどもと地域と、高齢化／マンション化が進む商店街とのつながりを作り直すきっかけは少しずつ感じられている。以前に、

自宅での実験の時にも感じたことだが、いちばん成功した手法・コミュニティイベントは、「その前に立っている」ことである。ぜひ一度、自宅の前に立ってみてほしい。その際、どうすれば（どのようなきっかけ作りで）前を通る人と自然に知り合えるかは、検討する価値のある課題であると思う。

結びにかえて

偶然性が開く新しいコミュニティの価値。
「安心のための壁づくり」から、偶然の出会いを生む「ノイズのある場づくり」へ。

異なる社会集団や文化をつなぐ、ゆるやかで偶然的な出会いや接点が生まれることは、橋渡し型のネットワークが形成される契機となりうる。偶然性は、異なる属性の人々が交差する機会を生み出す可能性がある。

多様な人々が交差することで、「橋渡し型社会関係資本」を自然に育てる。一時的・偶発的な接触でも、地域や文化の異なる人々をつなぐ弱い紐帯が増える。よりわかりやすく言えば、生活圏内での「顔見知り」を増やしていくこと。子どもや子育て中の家族、シニアなど、どうしても生活圏が狭い層を、今行きがかり上生活しているエリアという網で曖昧にくくって、監視や攻撃ではなく、互いに顔を知っていることが「安心・安全」につながるような社会をつくる。これからコミュニティがそのために存在し、排他性をこえた連帯を作るための手がかりになるように、自分ができることを試していきたい。

補足)

しかし、これが理想論でしかない可能性も捨てきれない。

今回の発表のきっかけになったのも、ある「コ

ミュニティ・イベント」の主催者が、街づくり事業は外国人などから愛する地域をまもる「安心のための壁」であるともとれる発言を聞いたことだった。コミュニティの同質化について、いくつか現状と問題意識を知ることができたものの、都市部を筆頭に、すでに社会の中での集団の棲み分けはかなり進んでいて、違う層との相互の「理解」が難しいのではないかとも感じる。

またこの「理解」という言葉の取り扱いである。障がい者理解、弱者・マイノリティ理解など、「多様性」をつくるために使われる言葉でありながら、むしろ「同質性」社会側からの「上から目線」になってしまうように感じられる。「相互理解」と「交流」の手前でとどめること、他者の考え方や、それぞれに異なる大事なものを持っていることへの「想像力」を育てるための策が必要ではないだろうか。「理解」というステップを保留にした場づくりを心がけて実践を続けていきたい。



2025年11月27日 受稿